

北海道の公立小学校におけるアイヌに関する 学習の現状と課題

—「他者性」の観点からの社会科副読本分析—

島津 礼子・丸山 恭司
(2020年10月5日受理)

Current Situation and Perspective of Ainu Studies at the Public Elementary Schools in Hokkaido
— Analysis of social studies supplementary readers from the point of view of *otherness* —

Reiko Shimazu and Yasushi Maruyama

Abstract: The purpose of this study is clarifying the current situation and perspective of Ainu studies at the public elementary schools in Hokkaido. We sent questionnaires to the 179 boards of education in Hokkaido to find out the educational plan, study and issues on Ainu studies there. 79 boards of education replied, 44 of which send to us their social studies supplementary readers which had been compiled and published by each municipality for elementary schools. From the replies, we find that 24 boards of education have had difficulty in establishing a teaching method for Ainu study, and 11 boards indicated current Ainu studies is not enough emphasis has been placed to associate with concepts of human rights or living side-by-side with Ainu. We analyzed Ainu descriptions in the social studies supplementary readers from the point of view of other or otherness by picking out terms which signify these concepts. As a result, we found readers were constructed around the concept of wajin (people who came from mainland Honshu, Shikoku and Kyusyu island) as subject, and Ainu as the other from using such terms like Ezochi (indigenous or assimilated), and by using the passive voice or causative verbs in Ainu descriptions. We also found that some narratives in the readers described differences of culture or worldview between Ainu and wajin. Finally, we concluded that Ainu studies at Hokkaido include the concept of Ainu as the other, but it is possible the use of this concept can help children understand not only Ainu culture but also themselves.

Key words: Ainu, indigenous, otherness, synoptic viewing,
social studies supplementary reader

キーワード：アイヌ、先住民、他者性、展望、社会科副読本

はじめに

1993年のノーベル文学賞受賞者であるトニ・モリスン (Toni Morrison) は、「いかにして私たちは人種差別主義者や、性差別主義者になっていくのか (モリスン, 2019, p.34)」という問いを發し、人々は講義や教育ではなく前例によって「他者化」を学ぶのだと述べた (モリスン, 2019)。モリスンはその著作に、米

国においてアフリカ系アメリカ人が「他者化」されていくプロセスを埋め込み、人が誰かを「他者化」することによってもたらされる心地良さの正体、喜びに切り込んでいる。彼女自身は、初めてモリスンの暮らす家を訪ねてきた曾祖母が、モリスンと姉を一瞥して「この子たち、異物が混入しているね。(These children have been tampered with. Morrison, 2017, p.2)」という言葉を發し、その言葉に母親が猛烈な抗議をした

ことから、幼いうちに自分たちが曾祖母から劣るものとみなされたことに気付いたという。漆黒の肌を持つ曾祖母は、褐色に近い肌の色をした曾孫姉妹を一族の血統からはずれた子どもたちだととらえたのだった。モリスンは、「よそ者」を定義することによって自分自身を定義し、「他者化」した当事者が何ら不面目を感じることなく差異を維持し享受する無自覚さを批判している（モリスン, 2019）。

1. 問題の所在と研究の目的

(1) 問題の所在

森本（2019）は、モリスンが描く「他者」や「他者化」の主題が、「西洋と東洋、白人と有色人、キリスト教と他宗教、権力を持つものと持たざる者といった多くのパターンに繰り返しあらわれる人間に共通の認識様式」（森本, 2019, p.10）であり、合理的な思考や明晰な意識に上らない領野で神話的構想に転化し、人々の見方や考え方を背後から支配する力を持つと述べている（森本, 2019）。「他者化」する側の心地良さと優越性を揺るぎないものにするために「他者化」は強化され、際限なく再生産される面は確かにあるだろう。しかし同時に森本（2019）は、自らが暮らす社会における特定の文化や価値観の産物となっている個人は、「他者化」を意識する時、自分の常識や価値観を問い直すことにもなると指摘している。

民族という点に目を向ければ、わが国においてはアイヌや琉球など異なる歴史や言語体系を持つ先住民族が存在する。服部（2020）は、アイヌ文化を教材として、創造的思考力を育成するための小学校高学年を対象とした単元を開発した。この授業における創造的思考力とは、「現状の社会背景や社会構造という枠組みの中で、自分自身で最高解、もしくはより良い解について創造する力」（服部, 2020, p.55）である。単元は全11時間で構成され、三部に分かれる。論者は、第二部と第三部の授業を見学した。第一部（4時間）では、子どもたちは文化とは何かを考え、アイヌ文化について学習した。第二部（4時間）では、アイヌ文化を伝承している講師2名を北海道から招き、アイヌ語やアイヌの歴史、文様、楽器、踊り、アイヌの人々の現在の生活などを紹介してもらった。授業終了後に児童は、講師を務められたSさんご夫妻に、多くの質問を投げかけた。例えば、「アイヌの人同士で戦争をすることはあったのですか？ どうやって解決していたのですか？」、「アイヌの人々の中で法律はあるのですか？」といった質問が出された。児童は、事前学習ではわからなかった事項や、自分たちの現在の生活や価

値観からは推察できない点についてSさんご夫妻に率直に尋ねているようであった。授業後に児童は、次のような感想を記した。

- ・ 授業のアイヌ語はとても発音が難しく、「サク」と「サブ」と「サツ」の違い^{注1}を聴いたときは、当時のアイヌの人々は文字をもたなかったのに、この三つを判別できたことに驚いた。
- ・ アイヌ民族の技術や知恵などを知って、アイヌ民族の人はすごいなと思った。日本人とアイヌ民族の考え方が違って面白いと思った。
- ・ 最も印象に残ったことは、カムイのことだ。人間が持っていない能力を持つものは、すべてカムイだという考え方に驚いた。

アイヌの歴史と文化を学習した後の第三部（3時間）の授業では、児童が自分たちとアイヌの人々の現在の生活に関連付けて学習した。アイヌの若者Mさんを取り上げ、Mさんはアイヌの文化をどのように伝えていけば良いかという問いに子どもたちは向き合った。教師は、かつてMさんがアイヌであることを隠していた時期があったこと、いっそ日本文化に溶け込むほうが良いのではと考えたことも説明した。児童は、Mさんが「伝えたほうが良いもの」、「それが実現可能かどうか」、「伝える方法」などについて意見を出し合い、クラス全員でそれらを検討した。最終的に児童は、異なる文化そのものを受け入れるよりも、自分たちの文化を融合させていくことが、異なる文化を受け入れやすくなるという結論を出した（服部, 2020）。

丸山（2002；2007）は、「展望」という方法によってこそ異なるものを理解できるとするウィトゲンシュタインの主張を紹介している。「展望とは、他者を自らの枠組みに取り入れて理解しようとするのではなく、他者と自己との溝の間に、想像力を駆使して理解可能な事例を埋めていく方法」（丸山, 2002, p.10）である。この授業では児童がアイヌ文化について深く学習し、実際にアイヌの人と対話することにより、さらなる関心が喚起されていった。児童が、自分たちの生活とつながる「他者」としてのアイヌへの接近を試みた授業だったのではないかと考える。このように、服部（2020）の実践は「展望」による他者理解を促す学習になっていたが、そうした実践が広く行われているのかどうか、行い得るのかどうかははっきりしない。これらを明らかにするために、公立小学校で用いられている社会科副読本を「他者性」の観点から分析し、教材レベルでそれらの点を明らかにする。

(2) 研究の目的と方法

本研究の目的は、以下の二点である。第一に、北海道内の公立小学校において行われているアイヌ関連学

習を調査し、取り組みや活動、方法、課題について現状を明らかにすることである。第二に、北海道の各自治体で用いられている社会科副読本におけるアイヌの歴史や文化に関する記述を、「他者性」の観点から考察することである。研究の方法は、北海道内にある179の地方自治体の教育委員会に質問紙を送付し、管内の公立小学校におけるアイヌに関する学習や取り組みを調査した。調査を依頼する際に返信用封筒を同封し、可能であれば回答とともに自治体が編集・発行している社会科副読本（以下では、副読本と表記）を送付してもらおうようお願いした。

以上により、アイヌに関する学習について北海道における実践の内容や課題を明らかにするとともに、アイヌの「他者性」が学習の中でどのようにとらえられているか明らかになると考える。平成29年告示の『小学校学習指導要領解説社会編』においては、「現在の北海道などの地域における先住民族であるアイヌの人々には独自の伝統や文化があることにもふれるようにする」（文部科学省、2018、p.128）と明示された。2020年4月より用いられている小学校教科書には、アイヌに関する記述が社会、国語、道徳など5教科に盛り込まれている。国内の先住民族がたどってきた歴史や和人との関わり、日本人でありアイヌでもあるといった一人ひとりのアイデンティティの問題、さらにはともに暮らすアイヌの人々の言語や文化をいかに存続させていくかという課題を授業の中でどのように取り上げていくのか、考えていく必要があるだろう。

先行研究において、公益財団法人アイヌ民族文化財団（旧名：アイヌ文化振興・研究推進機構）は、財団が作成し北海道内ならびに全国の希望する学校に配布している社会科副読本『アイヌ民族：歴史と現在—未来を共に生きるために』について、学校での使用状況を検証するとともに、アイヌに関する学習の課題について調査を行っている（アイヌ文化振興・研究推進機構、2016）。吉田（2012）は、北海道内の社会科副読本におけるアイヌに関する記述を、「学問との偏差アプローチ」と「理想化描写析出アプローチ」を用いて分析している。「学問との偏差アプローチ」とは、副読本内のアイヌに関する記述が歴史学などの成果からどのような位置にあるかを分析し、その偏差を類型化するものである。その目的は記述の適切・不適切を問うのではなく、何らかの意図があるものとして読み、どのような事件・人物を対象として評価が生じているかということに焦点を当てるものである（吉田、2012）。「理想化描写析出アプローチ」は、「学問との偏差アプローチ」の一種であり、副読本にある「アイヌ民族像のうち、われわれが見習うべき、“良きも

の・こと”、“アイヌ民族の一員として誇りに思うべきもの・こと”として、何が示されているかを析出する（吉田、2012、p.2）。何が取り上げられ、何が強調され、逆に何がそぎ落とされたのか、副読本の内容を叙述の部分と描写の部分に分けて分析する方法である（吉田、2012）。

また崔（2017）は、テレビドキュメンタリーの中で描かれたアイヌの「他者性」をめぐる言説を分析し、その文化的変容を明らかにしている。崔（2017）は、テレビドキュメンタリーのアイヌへのまなざしが「単一民族」、「救済」、「包摂」、「再現」という4つの視座があることを示した上で、テレビドキュメンタリー内のテキスト（ナレーション）をフィスクラ（1987=1996）の理論を応用して分析を行った。その結果、1959年から2000年に放送されたアイヌを取り上げたテレビドキュメンタリーが、「救済」のまなざしに、「主体化する他者」と「グローバル化の中のアイヌ」というまなざしに加わっていったことを明らかにしている（崔、2017）。

2. アイヌに関する学習の現状と課題

（1）アイヌに関する学習の現状

北海道内の地方自治体の教育委員会を対象とした質問紙調査は、2019年3月に調査票を送付し、2019年9月までに79の教育委員会から回答を得た（回収率44.1%）。調査票には、アイヌに関する学習の方針や施策ならびに管内の公立学校における取り組みを調査するために、以下の質問を設けた。

- ① 現在策定されているアイヌ民族に関する学習の方針、施策、プランの有無
- ② 指導資料におけるアイヌ民族に関する記述の有無
- ③ アイヌ民族について学ぶために特色のある取り組みを行っている学校の有無
- ④ 教員がアイヌ文化を学ぶための研修や組織、しくみの有無
- ⑤ アイヌ民族について学ぶために、博物館、資料館などの利用の有無
- ⑥ アイヌ文化を学習するための地域人材利用の有無
- ⑦ 自治体独自の社会科副読本作成の有無
- ⑧ 自治体独自の社会科副読本を作成している場合は、その内容におけるアイヌ民族に関する記述の有無
上記の質問項目に対する回答は、図1の通りである。

①のアイヌに関する学習の方針、施策、プランの有無については、北海道教育委員会の施策に準じているという回答や、策定した「教育推進計画」の推進項目の一つに「ふるさと教育の充実」を含め、子どもたち

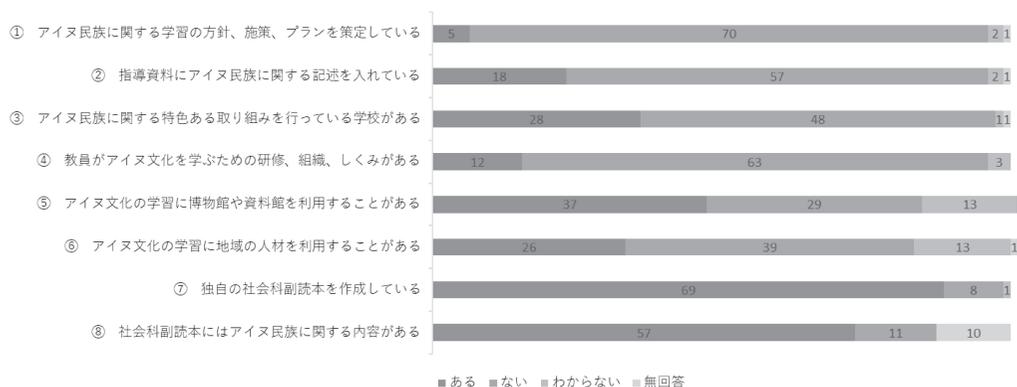


図1 アイヌ民族に関する学習について

が発達段階に応じてアイヌの人たちの歴史や文化を正しく理解するよう記載しているという回答があった。また、小学校教育課程編成の手引において第4学年社会科に「アイヌの人たちの生活と文化」の学習指導例を示している自治体もあった。

③の質問に関連して、アイヌについて学ぶ取り組みの具体的事例を挙げてもらったところ、次のような回答が寄せられた。例えばA市では、社会、道徳、総合的な学習の時間においてアイヌの歴史や文化にふれるよう指導がされていた。そのほか複数の小学校では、修学旅行の際に白老町のアイヌ民族博物館を訪れ、民族舞踊を見学したり、アイヌの楽器であるムックリの製作を体験するなどしていた。今後、児童がアイヌ文様の湯呑みを作ったり、アイヌの生活について展示を見学する予定も立てられていた。B町では小学校1校が北海道教育委員会から「北海道ふるさと教育・観光教育等推進事業」の指定を受けて、「アイヌの人たちの歴史・文化等」をテーマに学習していた。このように、アイヌの人たちが大切にしている文化や価値を対象に、地域の人材や文化財、民俗資料などを有効に活用した取り組みを行う学校が複数あった。

(2) アイヌに関する学習における課題

上記の質問のほか、アイヌに関する学習の課題をどのようにとらえているか、選択肢を示した上で複数回答可とした。結果は図2の通りである。選択肢に上げた課題以外には、以下のような回答があった。

- ・ 教育委員会内でのアイヌ民族、文化に関する話題、議論が極めて少ない。
- ・ 北方領土、防災教育、主権者教育等、今日的な教育課題が多々ある中で、教員が十分な研修を行うことができない。
- ・ 「和人とアイヌの混住の歴史」に対する評価が低い

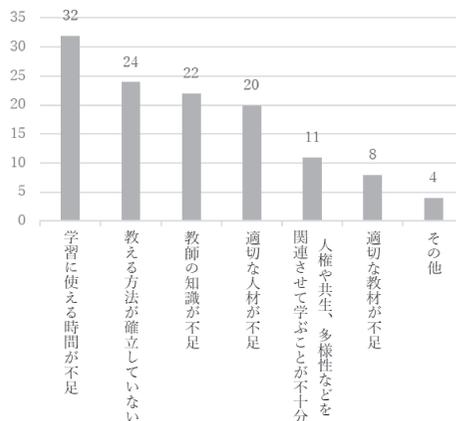


図2 アイヌ民族に関する学習の課題 (複数回答可)

ように思える。

- ・ 子どもたちの認識は、近世中頃以降の歴史からアイヌが和人に差別されたといったものが多い。もっと中世のアイヌ像も評価して、積極的に活動していた姿も紹介することが必要だと思われる。

3. 社会科副読本におけるアイヌに関する記述

(1) 社会科副読本におけるアイヌに関する学習内容

質問紙に回答を頂いた教育委員会79団体のうち、44団体から社会科副読本等の送付を頂いた。そのうち38団体から小学校社会科副読本原本、6団体から小学校社会科副読本の中でアイヌについて記述された部分の複写を頂いた。1団体からは、アイヌの歴史・文化を教えるために作成された教員用指導資料集が寄せられ

表1 社会科副読本内のアイヌに関する記述

カテゴリー	数	カテゴリー	数
アイヌの先住性	24	先住民と明記	7
和人による支配	11	差別・同化	3
交易の不公平	10	和人との戦い	14
チャシの遺跡	5	松浦武四郎	9
開拓におけるアイヌの協力・貢献	5	和人との混住	4
アイヌの偉人・首長	7	世界観・儀式	12
自然への配慮	5	狩り・衣・食・住	21
口承文芸・昔話・伝説	8	踊り・楽器	7
アイヌ語の単語・あいさつ	12	アイヌ語由来の地名	20
アイヌ語話者の減少	3	アイヌの現在	6

た。書名は、小学校社会科副読本と題されたものが32部、社会科郷土読本と題されたものが5部、ふるさと学習副読本が1部、不明が6部であった。編集・発行年別では、2009年以前に発行された副読本が3部、2010年から2014年までに発行されたものが12部、2015年から2019年までに発行されたものが23部、複写のため発行年が不明なものが6部であった。送付を頂いた44部の副読本すべてにアイヌに関する学習内容が含まれていた。その内容を整理したところ、20のカテゴリーに分類された。集計の結果は表1の通りである。

アイヌの先住性に言及している副読本は24部であった。その中でアイヌを先住民と明記しているものは7部であった。チャシとはかつてアイヌが築いた砦であるが、戦いのみならずチャランケ（話し合いにより解決を図ること）などに用いられる場でもあったという。チャシは今も地域の中に地形として残っていることから、チャシについて記述されている副読本が5部あった。和人との交易においてアイヌ側に不利益な点があった史実にふれている副読本は10部であり、和人の支配によりアイヌの生活が変わらざるを得なかったことを記述している副読本は11部であった。さらに踏み込んで、和人のアイヌに対する支配について、差別や同化といった言葉で表している副読本が3部あった。アイヌの不利益や和人の支配から生じた争いで大きなものは、1457年に起きたコシヤマインの戦い、1669年のシャクシャインの戦い、1789年のクナシリメナシの戦いであるが、これらについて記載された副読本は14部であった。

次に、地域の歴史や開拓とアイヌとの関連について記された部分における記述を調べた。ほとんどの副読本には、その地域における開拓の経緯、本州から入植した人々の出身県、開拓に貢献し町の発展に尽力した

和人の人物などに焦点が当てられ、詳しく紹介されている。その中でも、開拓にアイヌの協力や貢献があったことが書かれている副読本も5部あった。和人とアイヌの協力関係が開拓や稲作、鮭の養殖の成功を導いた事実もあり、具体的なアイヌの人名や集落の長の名を記している副読本も7部あった。

アイヌ語に関して、アイヌ語由来の地名については20部の副読本内で取り上げられていた。アイヌの単語やあいさつを紹介している副読本も12部あった。しかし、近年のアイヌ語話者の減少やアイヌ語が消滅の危機に瀕している事実²にふれている副読本は、3部のみであった。またアイヌの口承文芸であるユカラや昔話のウウエベケレを紹介している副読本が8部あった。そのほかアイヌの生活について、狩りや衣・食・住を説明している副読本が21部であり、動植物や物、現象などもカムイとして敬うアイヌの世界観や、イヨマンテ³（熊送り）の儀式を紹介している副読本が12部であった。アイヌの生活や世界観が、自然に配慮したものであると記述された副読本が5部あった。

「アイヌ文化の今」や「アイヌ文化を伝えて育てる人たち」と題して、現在のアイヌの人々やアイヌ文化を伝承する人々について記述されている副読本も6部あった。その内容には、アイヌの人たちの大切な文化がこれまで多く失われてきたこと、しかし1980年代から失われた文化の再生と伝承の活動を行う人々が増えてきたことなどが書かれていた。さらに、アイヌ文化は北海道の大切な文化であること、アイヌ文化は過去のものではなく、現代も私たちのまわりに息づいていることが記述され、毎年秋に行われる鮭を迎える儀式ベッカムイノミヤ、アイヌ刺繍の教室、サハリンアイヌの伝統弦楽器トンコリを用いたロックバンドなどについても、写真とともに紹介されていた。

表2は、表1に示した20のカテゴリーごとに、副読本に記述された文章の事例を示したものである。副読本は、主に小学校3・4年生が学習する教材として作成されており、ひらがなによる記述が多いが、表内には漢字に改めて記載した。これらのアイヌに関する記述について、「他者性」に関わると思われる言葉、表現には下線を付して析出した。「他者性」に関わると判定したのは、次のような言葉や表現が表れる部分である。まず、蝦夷地、和人、先住民、本州の人々などの「他者」の表象と思われる言葉と、戦い、差別、同化などの「他者化」の要素を含む言葉や説明がある文章である。和人という言葉は、一般的には使用されることが少ないが、アイヌに対して本州などからやってきた大和民族を表す言葉として用いられる。また、和人の視点から記述されたと思われるアイヌの世界観や

表2 社会科副読本におけるアイヌに関する記述と「他者性」

カテゴリー	社会科副読本における記述と「他者性」
アイヌの先住性	開拓が始まる前までは、北海道のことを和人(もとは本州に住んでいて、北海道に移り住んできた人々)は「蝦夷地」と呼んでいました。「蝦夷地」には古くからアイヌの人々が住んでいて、北海道のことを「アイヌモシリ」(人間の大地)と呼んでいました。
先住民と明記	アイヌの人々は、現在ではほかの日本人と同じ生活をしていますが、もともと北海道に住んでいた先住民族であり、自分たちのアイヌ語や自分たち自身の文化を持っています。
和人による支配	交易が和人の承認に任せられると、商人が儲けるためにアイヌの人たちを遠くまで働きに行かせるようになりました。また天然痘という病気が本州からもたらされたために、多くのアイヌの人たちが亡くなりました。
差別・同化	開拓使はアイヌの人々の儀式、女性の口への入墨の習慣などもやめさせ、アイヌ民族としての独自性をなくし和風化させようとする政策をとりました。そしてそこに暮らしていたアイヌの人々の土地や財産を取り上げたり、アイヌの人々を旧土人と呼び、和人とは差別したりしました。
交易の不公平	和人は米、酒、煙草などを船に積んで蝦夷地を持って来て、アイヌの人々が持ってくる熊や鹿の毛皮、干した鮭やニシン、昆布などと交換しました。しかし、本州の人々の中には、品質の悪い品物を持ってきたり、数をごまかす良くない商人もいました。
和人との戦い	戦いはシャクシャインをだまし討ちにした和人が勝ち、アイヌの人たちはさらに厳しく押しえつけられることになりましたが、ひどい交換の仕方は少し改められることになりました。
チャシの遺跡	博物館のすぐ隣には桂ヶ岡チャシと呼ばれる小高い丘があり、石碑が立っています。これは昔のアイヌの人々の砦のあとで、チャランケ(話し合い)をした場所でもありました。
松浦武四郎	1856年(安政3年)から3回にわたってこの地を探検したのは松浦武四郎です。そして『石狩日誌』という本に、この近くに住んでいたセッカウシというアイヌの人たちのことを書き残しています。
開拓におけるアイヌの協力・貢献	1886年(明治19年)頃に、テッピリアというアイヌ人家族が夕張川の側で暮らしていました。テッピリアは開拓にやってくる人々を丸木舟で岸の向こう側まで運んでくれたり、開拓の仕事を手伝ってくれました。病人が出た時には千歳まで薬を取りに行ってくれるなど、ずいぶん力になってくれました。
和人との混住	当初、館の住人は和人と考えられていましたが、平成12年の発掘調査で和人の墓のほか、3基のアイヌ民族の墓が見つかったため、館にアイヌ民族が存在していたことが動かしたいものになりました。
アイヌの偉人・首長	辯開風次郎 本名「イカシバ」落コタンの村長、獣医、薬草つみの名人。アイヌ民族と和人の懸け橋となり、北海道の発展に力を尽くした。
世界観・儀式	アイヌの人たちは、自然や動植物などは、神々が人間の世界に姿を変えて、地上に降りてきたものと考えていました。またカムイ(神)と人間は、それぞれがお互いに支え合って生きており、人間は自然界の一部で、そこで住まわせてもらっているという考えを持っています。
自然への配慮	自然や物には「たましい」があると考えるアイヌの人たちは、自然を荒らすことはしません。野山に入る時や獲物を獲った時には、神に感謝の祈りをし、物を使い終わった時には、心を込めて神の世界に送り返したのです。
狩り・衣・食・住	熊のいる穴を見つけると、入り口に丸太を何本も頑丈に立てます。そして、熊が出てきたところを矢で一斉に仕留めました。鹿は弓で仕留めることもありますが、追い詰めて崖から落としたり川や海へ追い出して舟で捕まえたりしました。
口承文芸・昔話・伝説	現在、アイヌ語はカタカナやローマ字で書かれています。アイヌの人たちは、物語や伝説、体験談や教訓などは歌い継ぎ語り継ぎして、口づてに伝えてきました。英雄や神を主人公にした物語や詩は今もたくさん残されています。
踊り・楽器	歌や踊りは儀式や人が集まった時に行います。カムイに感謝の気持ちを伝える場合や子守唄の他に、長く踊り続けて体力比べをする遊びの踊りなどもあります。
単語・あいさつ	トナカイやシシヤモ、ラッコといった言葉は、アイヌ語からきている言葉です。
アイヌ語由来の地名	アイヌ語地名は、地形の様子を表す地名、動物や植物に関する地名など、北海道に長い間生活してきたアイヌの人たちの知恵が込められています。これらの地名の意味を知ったり、残したりすることは、アイヌの人たちが長年守ってきた文化を後世に伝えるとともに、私たちの住む地域の歴史を知ることができます。
アイヌ語話者の減少	アイヌ語をよみがえらせようと開いたアイヌ語教室には、アイヌの人以外にもたくさんの人が参加して、言葉だけでなくアイヌ語の文化や歴史も学んでいる。
アイヌの現在	現在ではアイヌの人たちも、私たちと同じように暮らしています。私たちはお互いの文化の良いところを学び合い、共に豊かな生活ができるよう心がけることが大切です。

※「他者性」が表れている部分に下線を付した

文化の説明と、「～してくれました」などの授受表現、「～させました」などの使役表現が用いられている文章も、「他者性」が表れたものとして析出した。

(2) 社会科副読本に記述されたアイヌの物語

副読本内のアイヌの関する記述は、「私たちの暮らしのうつりかわり」や「郷土を拓いた人々と時代のうつりかわり」という、地域の歴史と現在を学習する章の一部として構成されていた。また、アイヌの口承文芸であるユカラや昔話を元にした物語、実話を元にした物語も記述されていた。その中の一つである「幻の島」は、C町の開町100年記念事業としてマンガ仕立てで作成された物語である。

<幻の島> (要約)

北海道に入植してきた開拓民は、新天地に米作りに適した場所を探した。水利が良く土地が肥え、大木があまり茂っておらず開墾しやすいところ、そして望郷の思いから後背地に小さな山がある、故郷の風景に似た場所を選んだという。十勝は秋になると川に鮭がのぼるアイヌにとっても暮らしやすい場所であり、明治11年より和人の入植が始まった。入植者は開墾がしやすい川の中州に小屋を建てた。しかし川が度々氾濫することを知っていたアイヌは、中州にチセ(家)を建てることはなかった。9月、大雨により氾濫を起こした十勝川の中州から、アイヌと和人が協力して逃げ遅れた人々を救った。しかし再び十勝川は氾濫し、中州はその後跡形もなくなった。現在は地図に記された川と町々の境界線のズレから、島があったことがわかる。

「幻の島」の物語は、開拓民の新天地に賭ける思いと、アイヌが培ってきた自然に対する知恵の間に差異があったことを描き出している。マンガで表現されていることから、登場人物の表情や吹き出しに書かれた言葉により、開拓民と和人の両方の思いを知ることがたやすくなっている。また、D村の副読本には、人間に育てられた1匹の小熊の実話を元にした物語が記述されていた。

<子熊ミル公の物語> (要約)

1949年の春、親子の熊が海沿いの崖の上を歩いていた時、突然雪が崩れて小熊は真逆さまに崖の下に転落した。小熊は猟師の家族に拾われたが、間もなくある人を買われて帯広の商店に運ばれた。小熊は両手にミルク瓶を抱えて飲む姿がかわいたために、「ミル公」と名付けられて人気者になった。しかしお店に来て3か月もたつと、「ミル公」は体も大きくなり、子どもたちとたわむれると、手の爪で子どもたちに傷を負わ

せるようになった。小熊を買って「熊送り」の見世物をし、金儲けをしようとする人が現れても、持ち主は子どもたちのアイドルとなった「ミル公」を手放すことはなかった。「ミル公」は大きくなり、持ち主は「ミル公」の将来を考えて札幌の動物園に寄付しようとしたが、戦後の食糧難のため断られてしまう。困りはてた持ち主は、出身校のN小学校の人たちと話し合っ、「ミル公」をアイヌのしきたりに従って、カムイ(神様)のところに送ることにした。昼は川遊びを楽しんでいたミル公も夜になると悲しげに吠え、人々は胸を締め付けられる思いであった。1949年9月、「ミル公」はアイヌの人たちの手による「イヨマンテ」によって、5,000人もの人々が見守る中、天国に昇った。ミル公の姿ははく製にされて、N小学校に保存された。30年後の1979年には、「ミル公」の石のお墓が建てられた。熊によってなくなった人のお墓はたくさんあるが、熊をまつたお墓は「ミル公」のお墓だけだそうである。

この物語が記述されているページには、「ミルちゃん」と書かれた看板のそばで、綱につながれて木製の檻の上に後ろ足で立つ小熊「ミル公」と、それを楽しく見つめる人々が写った当時の写真が掲載されている。また、N小学校に展示してある「ミル公」のはく製と、「ミル公」の碑の写真も添えられている。「子熊ミル公の物語」には、「他者性」を考えていく要素が含まれていると考える。例えば、アイヌは、動植物、水や火などにカムイの存在を認め、それらは何らかの役目を持って天から降ろされたと考えている。その中でも熊はキムンカムイ(山の神)として崇められてきた。萱野(2005)は、アイヌの熊に対する考え方が表れているものとして、アイヌの民話を紹介している。アイヌの民話や口承文芸には、動物などが一人称で語る形式が多いが、この民話も熊自身が語る形式をとって次のように始まる。

「私は神の国で暮しているクマ神の家族で、ある春の日に入り口でイヌのほえ声が聞こえ、そっと見ると精神の良いアイヌであった」(萱野, 2005, p.50)。アイヌの招きにより熊は自ら穴を出て矢を受け、気を失う。アイヌの家で熊は、火の神や村のアイヌたちの歓待を受け、たくさんのごちそうを食べ、踊りや歌を楽しみ、背負いきれないほどのお土産を貰って神の国に帰って行く(萱野, 2005)。熊の魂は神の国に帰るためお墓は建てられず、頭骨が祭壇に飾られる(萱野, 2003)。カムイである熊からアイヌへのお土産が、熊の肉や毛皮だと解釈される。これが、イヨマンテの儀式に見られる互酬性である。

「子熊ミル公の物語」では、イヨマンテの儀式の後、

「ミル公」のはく製が作られたり、石のお墓が建てられたりした。なぜ「ミル公」がはく製となり石のお墓が建てられたのか子どもたちが思考するとき、物語には判断材料としての時代背景や状況を伝える要素が含まれていると考える。中村（2020）は、様々な情報を整理して伝えるためにはストーリーが必要であり、「物語するという行為は、物語をつうじて世界を現出させる行為」（中村，2020，p.329）だと述べる。もちろん今日では、映像や動画もたやすく視聴することも可能であるが、野家（2005）は、「物語り」の持つ根源的機能とは、「人間の生活の中の特定の主題への連関」（野家，2005，p.316）を形作ることであり、「物語り」は悲しみや喜びといった直接的体験を理解可能な出来事として分節化し、自己の経験として受容可能なものとする述べる。副読本に記述されていた「幻の島」や「子熊ミル公の物語」など実話に基づいた物語は、ストーリーとしてアイヌの世界を現出させ、読み手を「他者」の理解や受容へと近づける機能を備えたものではないかと考える。

4. 総合考察

本稿では、北海道内の教育委員会を対象とした質問紙調査の回答から、公立小学校におけるアイヌに関する学習の現状と課題について明らかにした。また、自治体で編集・発行されている副読本の内容を整理し、「他者性」という観点から考察した。これらにより、以下の点が明らかになった。

第一に、アイヌに関する学習については、北海道内における豊富な文化財や地域人材を用いた学習や取り組みが行われていることがわかった。その一方で、アイヌに関する実践の蓄積がある道内においても、教育方法や他の概念との関連付けが模索されていることも示唆された。北海道内では、これまで多くの教育関係者の深慮のもと、アイヌの歴史や文化を学ぶための社会科副読本をはじめとした教材が作られ、アイヌの子どもたちに十分な配慮がなされた上で授業が行われてきた。子どもたちがアイヌを学ぶ取り組みには、質問紙調査の回答にもあったように、アイヌの人々やアイヌ文化の継承者の理解と協力が不可欠であった。アイヌの歴史や文化の学習に取り組む時、楽観的にとらえることなくこれらを忘れてはならないと考える。

第二に、自治体が作成した副読本を「他者性」という観点に着目して読み解くと、和人、先住民、本州の人々などの、「他者」を示す表象が表れていた。和人との関係の記述においては、和人がアイヌの人々に「～させました」などの使役表現が見られた。また、開拓

の歴史に関する記述では、アイヌが開拓民に対して「～してくれました」などの授受表現が用いられていた。これらから、副読本の記述における「主体」としての和人と「他者」としてのアイヌという関係性が見えてきた。「他者」としてのアイヌを、必ずしも否定的にとらえる必要はないと考える。本稿の冒頭で述べたように、「他者」の世界観に接することは、子どもたちにとっては自己の存在や価値観を揺さぶられ、問い直す機会、すなわち成長の機会ともなり得るためである。その一方で、「他者」と「自己」との力学においては、優越と遜色、多数者と少数者といった関係性がつきまとい、差別や分断、さらには少数者の排除という結果に陥ることも忘れてはならないだろう。言うまでもなく、「他者化」は争いや断絶の発端ともなり得るし、ひとたび融和や共生が叶ったとしても、再び集団の外部に、あるいは内部にすら別の「他者」が立ち現れる恐れもはらむからだ。

第三に、社会科副読本に記述された物語は、アイヌと和人の価値観の差異を現出させる効果を持つものであった。本稿に紹介することは叶わなかったが、副読本に記述されたアイヌの口承文芸や民話、伝説を元にした物語には、アイヌの世界観が豊かに表れていた。しかし、副読本全体をストーリー性のある物語ととらえたなら、北海道に先住していたアイヌの歴史のみならず、今を生きるアイヌの人々についても記述することで、同じ地平に共に暮らす「他者」としてのリアルなアイヌ像が立ち上がるように思われる。先述したように質問紙調査の回答には、アイヌの暮らしとその後の開拓をアイヌと和人の混住の歴史や協力にも焦点を当て、連続するものとして考えてみると良いのではないか、という提案も頂いた。

吉田（2012）は、教材としてのアイヌ文化を考える時、「子どもたちに一定の価値観を与えるための過去のアイヌ民族の側面をとらえたにすぎない」（吉田，2012，p.4）という批判を免れないことを指摘している。また瀬川（2005）は、「アイヌについて、事実にもとづかない奇妙な環境保護者のイメージが独り歩きしている」（瀬川，2005，p.241）と述べている。顧みれば論者も、「アイヌの人たちは自然と共に生き、自分たちの生活に必要な食糧だけをとり、持続可能な生活を送ってきた」、「アイヌの人々のライフスタイルに学ぶ必要がある」といった言葉からアイヌ像を描いていた。アイヌの物語を教材とする場合には、子どもたちの一面的な理解を避けるためにも、その全体と細部の両方に注意を払う必要があるだろう。

本稿においては、質問紙調査への回答を頂いた北海道内の一部の自治体のみを調査対象としており、道内

のアイヌに関する学習の全体像を描き出すことはできていない。それぞれの学校においては、先生方の教材研究のもと、多彩な実践が行われているだろう。また、令和2年度より小学校の学習指導要領が改訂されたことから、今後は社会科副読本も新しい学習指導要領に沿って内容が変わっていくと思われる。以上が、本研究の限界である。

おわりに

先述したA小学校のアイヌ文化を学ぶ授業に講師として来校くださったSさんご夫妻は、授業の最後に次のような言葉を児童にかけて下さった。「この日本の中で全然違う民族がいて、文化があって、面白い考え方かしていますよね。今生きている我々にとっても、学べることが多いと思うんです。もしみんなが一つ一つのものがかみ、神さまであって大事に扱わなきゃ嫌がるだろうな、寂しがるだろうなという考えを持てたら、物をもっと大事にできるということを学べると思うんです。これからもずっと興味を持ち続けてほしいと思います。日本には日本民族の一つの文化があるんじゃないかと、ほかにも色々な文化があるんだということを今日は知って貰えたかと嬉しく思います。イヤイライケレ(ありがとうございます)。」「北海道だけでなく日本全国にアイヌ民族は住んでいるということを知ってもらい、私もアイヌ民族ですけど、この街にもアイヌ民族は住んでいると思います。全国色々な所にアイヌ民族の血を引いている人はいるのでそのことを頭に置いてもらい、みんなと同じように変わりなく、ご飯も食べたり、お酒を飲んだり、学校に行ったり、コンビニに行ったりしているけど、アイヌ民族なんだ、ということも覚えておいてください。イヤイライケレ。」

【注】

注1 アイヌ語には、開音節の音節末に子音が1つ続く閉音節がある。「サク sak (夏)」, 「サブ sap (山を下りる)」, 「サツ sat (乾く)」のように、カタカナ表記では、小文字で表すが、日本語にはない音のため聞き分けることが難しい(中川, 2013)。

注2 UNESCO (2010) は、アイヌ語を極めて深刻な消滅の危機 (critically endangered) にある言語として指定している。

注3 熊送りの儀式は、「イヨマンテ」または「イオマンテ」の両方の表記が用いられている。『萱野茂のアイヌ語辞典』(萱野, 1996) では「イヨマンテ」

と記載されており、イ(それ)(=熊)を、オマンテ=行かせるの意であると解説されている。本稿では、副読本の記述と萱野氏の辞典に合わせ「イヨマンテ」と表記する。

【引用参考文献】

- 崔銀姫(2017)『表象の政治学:テレビドキュメンタリーにおける「アイヌ」へのまなざし』, 明石書店。
- Fisk, John & Hartley, John (1987) *Television culture: popular and politics*, Methuen, London = (1996) 伊藤守ほか訳『テレビジョンカルチャー:ポピュラー文化の政治学』, 粹出版社。
- 萱野茂(1996)『萱野茂のアイヌ語辞典』, 三省堂。
- 萱野茂(2003)『五つの心臓を持った男:アイヌの神作りと送り』, 小峰書店。
- 萱野茂(2005)『萱野茂:アイヌの里二風谷に生きて』, 日本図書センター。
- 萱野茂(2017)『アイヌ歳時記:二風谷のくらしと心』, 筑摩書房。
- 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構(2016)「小中学生向け副読本の配布・作成事業『アイヌ民族:歴史と現在~未来と共に生きるために~』アンケート調査報告」。
- 服部太(2020)「創造的思考力を育成する社会科授業:第5学年 わたしたちの生活と文化:アイヌの文化についてを事例にして」, 広島大学附属小学校学校教育研究『学校教育』, No.1231, pp.54-59。
- 丸山恭司(2000)「教育において〈他者〉とは何か:ヘーゲルとワイトゲンシュタインの対比から」『教育学研究』, 第67巻, 第1号, pp.111-119。
- 丸山恭司(2001)「教育・他者・超越:語りえぬものを伝えることをめぐって」, 『教育哲学研究』, 第84巻, pp.38-53。
- 丸山恭司(2002)「教育という悲劇, 教育における他者:教育のコロニアリズムを超えて」, 『近代教育フォーラム』, No.11, pp.1-12。
- 丸山恭司(2007)「言語の呪縛と解放:ワイトゲンシュタインの哲学教育」, 『教育学研究』, 96号, pp.115-131。
- 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領解説社会編』, 日本文教出版。
- 森本あんり(2019)「日本版読者に向けて」トニ・モルスン 荒このみ訳『「他者」の起源:ノーベル賞作家のハーバード連続講義録』, pp.6-15, 大日本印刷。
- Morrison, Toni (2017) *The origin of others*, Harvard University Press, Cambridge = (2019) 荒このみ

- 訳『「他者」の起源：ノーベル賞作家のハーバード連続講義録』，大日本印刷。
- 中川裕（2013）『ニューエクスプレス アイヌ語』，白水社。
- 中村隆之（2020）『野蛮の言説：差別と排除の精神史』，春陽堂。
- 野家啓一（2005）『物語の哲学』，岩波書店。
- 吉田正生（2012）『社会科教授用図書におけるアイヌ民族関係記述の生成と展開：教育実践者たちの軌跡とその背景』，風間書房。
- 瀬川拓郎（2005）『アイヌエコシステムの考古学：異文化交流と自然利用からみたアイヌの社会成立史』，北海道出版企画センター。
- UNESCO (2010) Atlas of the World's Languages in Danger. <http://www.unesco.org/languages-atlas/>

en/atlasmap.html（2020年9月20日情報取得）。

【謝辞】

関根健司氏，関根真紀氏，質問紙調査への回答ならびに社会科副読本の送付を賜りました北海道内の教育委員会の皆様に，厚く御礼を申し上げます。

【付記】

本研究は JSPS 科研費 JP17K18643 の助成を受けたものです。

本稿は2019年8月20日，日本ESD学会第2回大会における発表に加筆したものです。